様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２５１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２６８８

研究課題名（和文）昭和20・30年代の文集を用いて多角的に子どもの表現力を探求する研究

研究課題名（英文）Exploring Children's Expressive Abilities from Multiple Perspectives-Using a collection of compositions from the Showa 20s and 30s-

研究代表者
有働　玲子（UDOU, Reiko）

聖徳大学・教育学部・教授

研究者番号：５０２３２８８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、昭和20・30年代に作成された文集に着目し、多角的な視点から国語教育の子どもの表現力について分析することを目的とした。全国的な地域・学校・個人の文集を第一次資料として用い、抽出した70冊について方言学や読書学や児童文学や国語教育の立場から分析を行い、敬語意識の反映や読書感想文への導きや評価の萌芽等を明らかにした。
　同時に、表現力指導のベテラン教員により、当時の文集指導は児童の内面意識の育成、広義の語彙の育成、話しことばの育成に関連するという知見を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　戦後の文集を用いて、子どもの表現力の分析を多方面から行った学術的意義は大きい。日本語学・読書学・児童文学・国語教育の諸学問からの分析となっているためである。
　社会的意義としては、当時の地域社会の言語環境や学校状況が反映されており、例えば児童の敬語使用と方言使用との関わりには学校の指導意識を読み取る事ができるのである。

研究成果の概要（英文）： This study aims to analyze the expressive abilities of children in Japanese language education from multiple perspectives, focusing on compositions created in the Showa 20s and 30s.
Using compositions in various regions, schools, and individuals as primary sources, we analyzed dialectology, literary studies, children's literature, and Japanese language education. We examined aspects such as the reflection of honorific awareness, guidance for book reports, and the emergence of evaluation. Additionally, insights from experienced educators in expression instruction revealed that composition writing education during that time contributed to developing children's inner consciousness, broad vocabulary, and spoken language skills.

研究分野：教科教育学および初等中等教育学関連

キーワード：表現力　学校　作文・綴り方　人間教育　文章　内面　児童詩　評語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)背景

日本の学校教育のなかで、ひとりの個性を持つ表現者の育成として、作文・綴り方がある。近年、国語教育史研究では、それらに昭和 20・30 年代の日本社会の反映が指摘されているという見解がある。(田近洵一(2013)『現代国語教育研究』)。又、兵庫県の文集分析から、同時代を「戦後の「新教育」として国語科の概念語と枠組み、さらには方法を導こうとするものであったという。(菅原稔(2016)『戦後作文・綴り方教育の史的研究』」一方、研究代表者は、長年子どもの音声による自己表現の史的探求を行っていた(有働玲子(2011)『話し言葉教育の実践に関する研究‐大正期から昭和 30 年代の実践事例を中心にして』)。さらに、当時の、文字による自己表現について考察を始め、本研究はそのための基礎的な研究として開始した。具体的には昭和 20 年代の東京都の作文における自己表現について考察し、この方面の探求が次の課題となった。(昭和 20 年代の小学校文集における作文指導の一考察‐吉田瑞穂の「いきたことば」の指導より-)『解釈』2016/第 62 巻 690 集)」

＜戦前＞　　**＜＜昭和 20・30 年代＞＞**

文語調　－　口語調　－ラジオ//テレビ：メディアの普及
国定教科書　－　教科書会社による検定教科書－**民主的な教育**/言語生活/言論/出版
模範的な表現　－　子どもの表現　【音声表現・文字表現】　**自己表現の保証**

(2)動機

研究代表者が私蔵している同時代の文集に着目をした。先行研究では扱いえていない、自己表現からの作文・文集について、多角的な視座を据えての基礎的研究に着手をしたのである。具体的には、昭和 20 年・30 年代の全国文集(地域・学校・学級)を代一次資料に据え、子どもの文章表現に即して分析を行うのである。

内的ストーリー(子どもの視点で思いや行動が語られている)が、作文にどのように現れているのかに着目し、自己表現(子どもの個性的な自由な表現であり、子どもの視点から現実や生活やイメージ世界等を表す表現である)の観点を重視しながら、考察を行う。更に考察の軸として、方言等の言語コード、読書文化、児童文学の影響、など、の多角的な視座を据えるという特色を有する。なお、文集を可視化するための基盤的な作業(天干干し、補修、スキャン、データ)が必要であり、内容として分析研究のために必須であり、素材基盤研究という構造を持つ

２．研究の目的

本研究は、昭和 20 年・30 年代の地域・学校・個人文集、約 1000 冊に着目し、子どもの表現力について多角的な視点からの考察し、教育的な表現力の育成の着眼点を示すことを目的とする。

(1)第一次資料文集を、日本語学、読書学、児童文学、国語許育の多角的な立場から、様相を明らかにする。

(2)第一次資料文集を、基盤的な作業(天日干し、補修、スキャン、データ)を各専門家に依頼して、文集の中身を可視化できるようにする。

３．研究の方法

上記の目的のために、発掘された第一次資料を可視化できるような状態にすることを第一義に行った。基盤的な作業を重視し、その作業のために専門家に依頼して、内容を可視化できるような方法にて予算の範囲となることを念頭に置きながら、進めた。並行して、共同研究者に考察を依頼した。

(1)具体的には多方面の文集の可視化のための専門家依頼の実施である。専門家とは、湿り気を除くために天日干しをする専門家、写真入り絵図版入りの文集を専門家、表紙及び内部の破損状態を修復する専門家、その結果再生したそれぞれの文集に戻す専門家のことである。その作業を経てから、デジタル化する専門家の手に渡るような方法を採用した。専門業者に相見積もりをとり、安価な専門家業者に依頼をすることを実施する。しかしながら、予算的に不可能な場合は、それらの文集を考察の対象から、外し、予算範囲で補修できる文集のみとする。

(2)上記より、日本語学、読書学、児童文学、国語教育の立場から考察し、冊子・発信をする。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

研究代表者(有働玲子)が私蔵していたすべての文集のリスト化が完成した。その結果、地域文集、学校文集、学級文集、その他(教師文集、保護者文集、個人文集、詩集、文学同人誌、作文用紙による冊子集等)の分類を行い、全体の構造を明らかに出来た。

地域文集 217 冊、学校文集 202 冊、学級文集 181 冊、詩集 54 冊、その他 32 冊のみが文集形態である。可視化できるようになった文集を第一次資料として用いて、日本語学、読書学、児童文学、国語教育の立場(共同研究者)から考察を行い、公開研究会を行い、冊子にまとめた。『昭和

20・30 年代の文集を用いて多角的に子どもの表現力を探求する研究』(A4 版、141 頁)。しかし、その他はまだ修復の課題を有しており、それぞれの専門家に依頼を繰り返している(予算の課題がある)。

抽出した文集を共同研究者である、日本語学(竹田晃子)、読書学(稲井達也)、児童文学(松村裕子)が考察を行った。なお、国語教育に関しては、代表研究者(有働玲子)が年表などの資料考察を行い、更に、国語教育の実践者による考察(東京都教職員研修センター教授、平林久美子等)という形式である。しかし、これらの考察に関しては、現在の著作権の課題があるため、多くの限定をかけることになり、考察及び抽出に関する行程は困難であった。

次に具体的にその内容について、成果と位置づけ、展望、知見などについて、各分野からの論考を元にして、順番に述べることとする。なお、頁は成果報告書の冊子のものを示す。

(2)日本語学の立場　「児童・生徒の作文にみられる言語表現―方言と敬語を中心にー」　竹田晃子　pp.14-34

①成果と位置づけ

竹田晃子は、話しことばの反映の特色として、特に方言と敬語に着目し、考察をする。扱った文集は 61 冊であり、具体的なことばを用いて記し、次のような構造化を示した。概ねイ～⑩による。④～⑥の順番や配置は、文集により異なるとする。また、全文集が縦書きを基本としていて、一部の記録文で横書きが使われていることを明らかにした。資料リストの一部を次のように掲載をしている。

①表紙（児童や生徒による版画が多く、多色刷りも多い）
②巻頭言・あいさつ・趣旨説明、巻頭詩・版画・写真など
③目次（この部分にのみ筆者の学年が書かれていて、本体には書かれていない場合がある）
④本体（児童や生徒による文章：生活文、詩、短歌、俳句、日記、手紙、学級新聞、記録文（観察・見学・研究・実験・児童会など）、童話・劇脚本・ことば遊び、書道作品、版画・絵など）
⑤選評・入選者一覧
⑥文集活用の手引き、指導者のために
⑦作文ワーク、良い作文を書くために
⑧父母のみなさまへ
⑨原稿募集・受贈誌御礼・研究会記録
⑩編集後記・編集委員・奥付、広告（全国誌）
⑪裏表紙

No.	種類	誌名・巻号等（学年等）	発行年	発行所 所在地	編集者	頁数
1	学校	学校文集　石岡の子ども・第7号（4・5・6年）	1956	茨城県石岡市	石岡小学校・国語研究部	77
2	学校	高齢クラブ作品集・第1号	1958	茨城県日立市	仲町小学校・作文クラブ	34
3	学校	やつ池・第7号	1953	千葉県入間郡	東金子小学校・国語部	53
4	学校	こばと・第2号	1950	千葉県印旛郡	成田小学校	63
5	学校	見つめる子ら（低学年）	1956	千葉県木更津市	西清小学校	95

②展望と知見

方言と敬語については次のようになる。

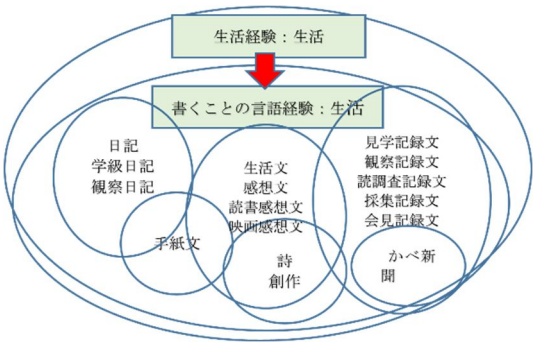
〈方言：文法現象〉命令・禁止・勧誘、授与動詞、断定辞、終助詞のほか、伝聞、引用、自発、過去回想、疑問、推量、同意要求、義務、テンス・アスペクト、条件、原因・理由、否定などの表現に、方言的特徴が観察された。音声や語彙、談話・言語行動についても、方言研究で地域差が指摘されていた現象が観察された。

〈敬語〉尊敬語と謙譲語のうち、尊敬語が多く、特に「言う」「教える」に関わる動詞の尊敬語が多い。敬語が使われるのは身近な大人である教師・両親・祖父母などの動作が最も多いが、東日本では初めて会った知らない大人に対しては使われない傾向、あるいは敬語表現そのものを作文に使わない傾向がみられた。また、使われた場合でも、東日本の作文には敬語使用の不徹底が多く観察され、敬語が運用される社会的階層構造を完全に理解しておらず、学校での作文指導という枠組みの中で表面的に敬語を使っていたと考えられる。これに対して、近畿地方の作文には敬語が多く使われており、他地域に比べると敬語が徹底される傾向がある。この結果は、特に近畿方言で敬語が発達しているというこれまでの方言研究の成果と重なる。

以上のように、当時の大人にとって望ましい子ども像が、文集の編集や、個別の作文指導によって表現されている。当時の作文指導には、よく「ありのまま」という文言が掲げられるが、文集に掲載された作文は指導の成果であり、まったくの「ありのまま」ではないと考えられる。また、現代の小学生や中学生の作文と比較することで、1950 年前後の作文の特徴をさらに見いだすことができるだろう。

(3)読書学の立場　「読書感想文の歴史的検討‐昭和 20・30 年代の論考や学校文集を例にして‐」　稲井達也　pp.35-41

①成果と位置づけ
稲井達也は戦後教育のなかで、読書感想文は、独自のジャンルとして発展を遂げていると仮定し、当時の学校文集に掲載されている読書感想文を具体的にあげながら、独自性を明らかにした。長野県諏訪市立高島小学校の学校文集『たかしま』（信濃教育会出版部印刷）（1959（昭和 34）年 3 月編集）について、分析し、次のような性格経験と言語経験の関係性を示した。小学校学習指導要領に依拠しながらも、独自の指導形成を行っていることを明らかにした。



「評語」からは、本の筋を工夫して読み取ったことも交えて書くこと、本の筋を順序よく構成すること、そして、自分の気持ちを書くことが読書感想文の要件として考えられている。また、学校文集『たかしま』では、感想文、読書感想文、などと明確に文種が分けられているが、生活文として全ての文種を包括的に捉えることができるのである。

②展望と知見
学校の教育活動の中で、生活経験と言語経験が結びつき、編集に当たっては、文種に対する意識が働いている。単なる教育活動の成果物として雑駁にまとめられた学校文集にではない。このような児童の生活経験と言語経験の位置付けがある。

国語科教育の関係者が読書感想文コンクールに主体的に関わっているわけではなく、学校図書館担当者を中心として、課題図書の選定によって出版界とも関係性を保ちながら、コンクールを発展してきてもいる。学校教育の中での読書感想文指導が今後どのような報告を辿るか、メディアとの関係が視野に入るであろう。

(4)児童文学の立場　「児童雑誌「銀河」と批評指導」　松村裕子　pp.42-48
①成果と位置づけ
松村裕子は、「銀河」（1946-1949、新潮社）が、作文教育に与えた影響について考察した。

戦後すぐ、良心的と呼ばれた児童雑誌が次々と創刊された。1946 年創刊に「赤とんぼ」「子供の広場」「少国民世界」「銀河」がある。このうち「銀河」は批評を募集した点に特徴がある。この雑誌は山本有三（1887-1974）が中心となり、当時成蹊学園で主事を勤めていた滑川道夫（1906-1992）を編集長に迎えて出発した。石井光男（1918-1981）、のちに吉田甲子太郎（1894-1957）らが編集に携わった。文字を横組みにしたり、社会科研究作品の募集をしたりと、批評募集以外にも革新的な取り組みをおこなっている。批評の選者となったのは古谷綱武（1908-1984）で第 3 巻第 5 号（1948 年 5 月）より第 4 巻第 8 号（1949 年 8 月）の終刊まで批評欄を担当した。

なお 1948 年は毎日新聞社「読書世論調査」が実施されたり、文部省の『学校図書館の手引』が発行されたりと児童の読書指導についての準備が進められた時期でもある。「銀河」初代編集長の滑川は 1947 年から手引作成の準備に関わっている（注 4）。また 1950 年には全国学校図書館協議会が発足している。批評募集が行われた背景には、戦後の学校図書館活動や読書指導の必要と関連していると考えられる。次に考察資料一覧の一部を掲げる。

発行年月	巻号		備考
1948.3	第 3 巻第 3 号	銀河の読者について感じたこと（古谷）	原稿募集告知
1948.4	第 3 巻第 4 号	君たちの批評とぼくの批評（古谷）	批評の例

主な書き手は小学校高学年から中学生であること、全国から批評が寄せられていることがわかる。また複数回掲載されている者も少なくない第 3 巻第 10 号では愛媛の中学で「銀河の批評会」ができたことが報告されているしかし、原稿の募集範囲を広げた 1949 年以降はあまり批評が寄せられていない。そのかわり「感想」として、映画の感想や詩について考えたことなどが取り上げられている。

②展望と知見
「銀河」で試みられた小中学生による批評は、作文指導に取り入れられたのであろうか。今回のリストにより、1955 年の青少年読書感想文コンクール開始に先立ち、1950 年の文集にはすでに読書感想文が取り上げられていることがわかったその一冊は成蹊学園のものであり、「銀河」初代編集長である滑川の勤務先でもある。

この時期は、読後指導として記録をすることの大切さを感じながら、何をどのように書かせるのかを模索している時期であったといえるだろう。その試行錯誤のひとつが「銀河」での批評指導だったと捉えられるのではないだろうか。

(5)国語教育の立場　「昭和 20・30 年代の年表と文集作成者の声」　有働玲子　pp.6-13
①成果と位置づけ
有働玲子は、戦後の文集に関わる略年表の作成を試みた。特色は 2 つである。第一は昭和 24 年全国教育長会議で教員のレッドパージが開始された前後にも、民間教育団体が設立されていたことである。市井の教師が、具体的な教室経営を模索する時に多様な学びの場が存在したのであ

る。第二は昭和 27 年,GHQ により教育指導者教習の国語科教育法講座が開講された後、管制の作分指導との関係が螺旋のように継続し、市井の教師に影響を与えたことである。しかも、話しことばである音声表現にも着目しながら、子どもの自己表現を培う文章表現として文集を作成していったと予想される。そういった自己表現に着目した、表現の育みの様相を多角的に分析する際の、一つの物差しとして年表を作成することを試みている。

同時に、第二部として、現在の実践教師に具体的な文集に即して、分析を試みることとした。そのことにより、展望と知見を示すことができた。

②展望と知見

8 人の実践者の分析の中から小学校と中学校の事例を示す。地域文集『すみだ』第 2 号（墨田区）（1955）の考察は、平林久美子が行い、「生活と作文がむすびつていること」指摘した。学校文集『白いくも』（台東区育英小学校）（1958）の考察は、武井二郎が行い、「学校文化としての作分教育の積み重ねがあり、文集をはこうすることが、子どもたちの文章表現力や教師の作分指導力を高める重要な礎になっていた」としている。学校文集『さくぶん』（新宿区淀橋第一小学校）の考察は、岡崎智子が行い、「敬語表現が豊かに使用されている。同時に児童を取り巻く生活環境や言語環境によって児童の語彙が形成されている」としている。学校文集『ふもと』（静岡県富士宮市中学校文集）（1954）は白井理が考察し、「詩を中心に編集され、音韻を重視し、生活に題材を求めて表現活動をしている」ことを指摘している。

こういった指摘を含めて、学校文化を形成すること、及び言語環境の整備となること、言語生活の向上を目指すこと等の多様な価値を文集が担っていたと考察される。

参考文献

- 滑川道夫『日本作文綴り方教育史３〈昭和篇〉』1983、国土社
- 日本作文の会『作文と教育』〈復刻版〉1986,岩崎書店〈デジタルコレクション〉
- 真田信治『地域言語の社会言語学的研究」和泉書院
- 加藤正信『全国方言の敬語概観』『敬語講座 6：現代の敬語』1973 明治書院
- 「少女クラブ」第 24 巻 9 号、講談社、P.39
- 滑川道夫『生活教育の建設』P.127 初出は「読書指導と生活教育」『生活学校』1947 年 9 月号。座談会出席者は、波多野完治、菅忠道、関野嘉雄、国分一太郎、稲垣友美、飯沼文子。
- 文部省『学校図書館の手引』1948
- 萬屋秀雄『読書感想文の読者論的研究』1997。明治書院
- 西尾実他編『国語教育辞典』1956、朝倉書店

国語教育の子どもの表現力に関わる略年表（音声表現文字表現の育成）

			おもな出版物		おもな研究会など	社会情勢
1945	昭和20				名古屋国語研究会 寒川道夫・稲垣寿年ら	⑤「戦時教育令」公布。 ⑧ポツダム宣言受諾。 ⑧連合軍進駐。 ⑨連合軍最高司令官マッカーサー、日本管理方針☞明。 ⑩「日本教育制度ニ対スル管理政策」について総司令部から指令。
1946	21	4.1 5 6.1 7.20	『赤とんぼ』創刊 実業の日本社 藤田圭雄（～ 48・10） 『子供の廣場』新世界社 森脇将光・大久保正太郎・菅忠道・小林純一・国分一太郎・来栖良夫・猪野省 三・滝沢不二男 『コドモノハタ』新世界社 小林純一・清水たみ子 『国語教育創造』志垣寛主宰・寒川道夫編（～ 48・10・14 号まで） 『詩の国』白井書房 鳴原一穂 『明るい学校』創刊 民主主義教育研究会（～ 48・1）、『あかるい教育』と改称し 48・3 ～ 49・8 季刊『新児童文化』国民図書刊行会 巽聖歌 『生活学校』復刊 菅忠道・国分一太郎・滑川道	3.7 4.19	児童文学者協会結成 民主主義教育研究会発足 秋田県国語研究会 秋田綴方誌上展覧会 『岐阜の子ども』岐阜県教組発行子ども新聞	③第一次米国教育使節団来朝。 ⑤文部省「新教育指針」公示。 ⑧「教育刷新委員会管制」

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計27件（うち査読付論文　11件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 マリア・エレネ・ティシ、松村裕子	４．巻 27
２．論文標題 イタリア語版ちりめん本について	５．発行年 2024年
３．雑誌名 白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集	６．最初と最後の頁 153-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松村裕子	４．巻 26
２．論文標題 豆本『猿かにはなし』影印と翻刻	５．発行年 2024年
３．雑誌名 児童学研究－聖徳大学児童学研究所紀要－	６．最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 有働玲子	４．巻 39
２．論文標題 日本における戦後期の文集について－地域・学校文集を中心にして－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本教育情報学会太海年会　年会論文集	６．最初と最後の頁 325-326
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 有働玲子	４．巻 22
２．論文標題 小学校の入門時期における口頭作文の指導－昭和20年代の文集より－	５．発行年 2024年
３．雑誌名 聖徳大学生涯学習研究所紀要	６．最初と最後の頁 25-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 有働玲子・平林久美子	4．巻 13
2．論文標題 1970年前後の文集指導－入門期への着目－	5．発行年 2023年
3．雑誌名 聖徳大学教職研究科紀要『教職実践研究』	6．最初と最後の頁 13-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 有働玲子・小川雅子	4．巻 第21号
2．論文標題 昭和20・30年代の文集などにみる国語教育の話しことばの育成について	5．発行年 2023年
3．雑誌名 聖徳大学生涯学習研究所紀要	6．最初と最後の頁 9、19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 有働玲子	4．巻 No.609
2．論文標題 読み聞かせー多様な聞き手を育むためにー	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本国語教育学会　月刊　国語教育研究	6．最初と最後の頁 28、31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 有働玲子	4．巻 第860号
2．論文標題 国語教育と平和ー教科教育学の立場から	5．発行年 2022年
3．雑誌名 全国学校図書館　学校図書館	6．最初と最後の頁 50、51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 有働玲子	4．巻 第861号
2．論文標題 国語教育と平和②―肉声の力	5．発行年 2022年
3．雑誌名 全国学校図書館　学校図書館	6．最初と最後の頁 54、55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 有働玲子	4．巻 第862号
2．論文標題 国語教育と平和③―平和学習に関する卒論から	5．発行年 2022年
3．雑誌名 全国学校図書館　学校図書館	6．最初と最後の頁 58、59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 有働玲子	4．巻 第863号
2．論文標題 国語教育と平和④―言葉の共有	5．発行年 2022年
3．雑誌名 全国学校図書館　学校図書館	6．最初と最後の頁 42、43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 有働玲子	4．巻 第864号
2．論文標題 国語教育と平和⑤―中学校における総合的な学習の時間	5．発行年 2022年
3．雑誌名 全国学校図書館　学校図書館	6．最初と最後の頁 64、65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 有働玲子	４．巻 第865号
２．論文標題 国語教育と平和⑥―真理は人を自由にする	５．発行年 2022年
３．雑誌名 全国学校図書館　学校図書館	６．最初と最後の頁 44、45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松村裕子	４．巻 834号
２．論文標題 りんとカヌー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 「母の友」	６．最初と最後の頁 42、43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 稲井達也	４．巻 第859号
２．論文標題 ポストコロナを見据えて「より善く生きる」教育を切り拓く 第6回	５．発行年 2022年
３．雑誌名 全国学校図書館　学校図書館	６．最初と最後の頁 79、80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 稲井達也	４．巻 第877号
２．論文標題 DX社会を見通した読書指導の工夫 ーZ世代に向けた読書指導をめぐってー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 教育科学国語教育	６．最初と最後の頁 54、59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 竹田晃子、有働玲子、稲井達也、松村裕子	４．巻 20
２．論文標題 昭和20・30年代の文集にみることばと表現	５．発行年 2022年
３．雑誌名 生涯学習研究所紀要（聖徳大学生涯学習研究所）	６．最初と最後の頁 1、12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松村裕子	４．巻 23
２．論文標題 ちりめん本　英語版とスェーデン語版の比較	５．発行年 2021年
３．雑誌名 児童学研究―聖徳大学児童学研究所紀要―	６．最初と最後の頁 １～１０
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 有働玲子	４．巻 第66巻第5･6号 通巻714
２．論文標題 昭和30年代のことばの教育-西成瀬小学校の指導より-	５．発行年 2020年
３．雑誌名 解釈-解釈学会-	６．最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松村裕子	４．巻 第22号
２．論文標題 Japanesiska studier och skizzer における日本昔話の紹介について　"Tre spegelbilder"とちりめん本 Three Reflections との比較を中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 児童学研究-聖徳大学児童学研究所紀要-	６．最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松村裕子	4．巻 -
2．論文標題 『欧文日本昔噺』シリーズの昔話について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ちりめん本にみる東西文化の融合-明治の木版多色刷り絵本の世界	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹田晃子	4．巻 173
2．論文標題 災害時の方言とコミュニケーション：日本語教育と方言研究の連携のために	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本語教育	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹田晃子・小林隆・今村かほる・大野眞男・杉本妙子・東北大学方言研究センター	4．巻 6
2．論文標題 公開展示報告「小林好日博士の東北方言調査の資料，東日本大震災における方言をめぐる活動の紹介」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 方言の研究	6．最初と最後の頁 149-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲井達也	4．巻 2019年5月号（823号）
2．論文標題 挑戦する学校図書館・３スーパーサイエンスハイスクールの学びをデザインする学校図書館(1)-医学部進学を実現する東京都立戸山高等学校の取組み-	5．発行年 2019年
3．雑誌名 「学校図書館」	6．最初と最後の頁 82-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲井達也	4．巻 第2号
2．論文標題 次期学習指導要領における読書指導の位置づけ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 これからの国語教育	6．最初と最後の頁 3-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲井達也	4．巻 2020年2月号(842号)
2．論文標題 国語授業で実践したい　これからの読書活動　語彙力・情報活用能力を育む読書活動　読書生活の創造をめざして	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育科学国語教育	6．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 稲井達也	4．巻 第179号
2．論文標題 読書を通して、リテラシーを高める-実社会・実生活で生きて働く言語能力の育成のために-	5．発行年 2019年
3．雑誌名 LISN	6．最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 有働玲子、平林久美子、白井理、小川雅子
2．発表標題 国語科における文集の可能性－昭和20年代から昭和40年代に着目して－
3．学会等名 第145回全国大学国語教育学会信州大会
4．発表年 2023年

１．発表者名 有働玲子
２．発表標題 日本における戦後期の文集について－地域・学校文集を中心にして－
３．学会等名 日本教育情報学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 稲井達也
２．発表標題 戦後初期における阪本一郎の読書指導論
３．学会等名 第145回全国大学国語教育学会信州大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 稲井達也、高山実佐、畑綾乃、高松美紀
２．発表標題 これからの文学の学びを考える－「言語文化」からの発展性や教育のグローバル化に着目して－
３．学会等名 第145回全国大学国語教育学会信州大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 有働玲子
２．発表標題 国語科における表現力の育成―話しことば・言語環境・時代生（昭和20-40年代付近） 等の視点よりー
３．学会等名 全国大学国語教育学会　第142大会東京大会(オンライン)
４．発表年 2022年

１．発表者名 稲井達也
２．発表標題 戦後初期における読書指導ー学習指導要領と『学校図書館の手引』を手がかりにしてー
３．学会等名 全国大学国語教育学会　第142回東京大会(オンライン)
４．発表年 2022年

１．発表者名 稲井達也
２．発表標題 高校国語科における教科の横断的な学習の構築(1)ー国語科と美術科の協働的な授業の試みー
３．学会等名 全国大学国語教育学会　第142回東京大会(オンライン)
４．発表年 2022年

１．発表者名 稲井達也
２．発表標題 言語文化の学びの系統性をどうつくるか
３．学会等名 全国大学国語教育学会　第143回千葉大会千葉大学教育学部
４．発表年 2022年

１．発表者名 小野正弘、竹田晃子、川崎めぐみ
２．発表標題 オノマトペ認定の差異とその基準：宮沢賢治「なめとこ山の熊」を題材に
３．学会等名 日本語学会2021年度秋季大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 有働玲子
２．発表標題 1950年代の小学校文集における表現指導の―考察―吉田瑞穂と『すぎなえ』を中心に―
３．学会等名 全国大学国語教育学会　第140回2021年春季大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹田　晃子
２．発表標題 東北方言における条件表現の形式―近代の方言変化を読み解く―
３．学会等名 日本語文法研究のフロンティア―日本の言語・方言の対照研究を中心に―（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹田晃子・小林隆・今村かほる・大野眞男・杉本妙子・東北大学方言研究センター
２．発表標題 公開展示「小林好日博士の東北方言調査の資料，東日本大震災における方言をめぐる活動の紹介」
３．学会等名 日本方言研究会第109回研究発表会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 有働玲子・小沢貴雄・浅田孝紀・畑綾乃・稲井達也（コーディネーター）
２．発表標題 「昭和20.30年代における児童の自己表現-文集「真人」等を用いて」（ラウンドテーブル「語彙力を捉え直す」）
３．学会等名 全国大学国語教育学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計16件

1．著者名 竹田晃子、多屋光孫	4．発行年 2024年
2．出版社 合同出版	5．総ページ数 192
3．書名 日本語のゆたかさがぐんぐん身につく　子どもオノマトペ辞典	

1．著者名 稲井達也	4．発行年 2023年
2．出版社 東洋館出版社	5．総ページ数 188
3．書名 はじめての高校探究	

1．著者名 小林隆(編)／有元光彦、勝又琴那、川﨑めぐみ、櫛引祐希子、小林隆、坂喜美佳、作田将三郎、椎名渉子、竹田晃子、田附敏尚、津田智史、友定賢治、中西太郎、舩木礼子、松田美香	4．発行年 2022年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 386
3．書名 全国調査による感動詞の方言学	

1．著者名 有働玲子(編)/有働玲子、竹田晃子、稲井達也、松村裕子、平林久美子、武井二郎、岡崎智子、川端秀成、品川孝子、柳田良雄、白井理、棚田明希	4．発行年 2022年
2．出版社 有限会社サンプロセス	5．総ページ数 141
3．書名 昭和20・30年代の文集を用いて多角的に子どもの表現力を探求する研究（文部科学省科学研究費助成事業（基盤研究（C））課題番号9K02683：研究成果報告集）	

1．著者名 井上文子、尾崎喜光、櫛引祐希子、熊谷智子、小林隆、佐藤亜実、椎名渉子、篠崎晃一、竹田晃子、津田智史、中西太郎、松田美香	4．発行年 2021年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 356
3．書名 全国調査による言語行動の方言学	

1．著者名 大野眞男、杉本妙子、児玉忠、小林初夫、礼埜和男、佐藤髙司、加藤和夫、今村かほる、竹田晃子、小島聡子、山浦玄嗣、三樹陽介、茂手木清、金田章宏、山田敏弘、菊秀史、中本謙、小林隆、内間早俊、坂喜美佳、佐藤亜実、小原雄次郎、櫛引祐希子	4．発行年 2020年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 326
3．書名 実践方言学講座2　方言の教育と継承	

1．著者名 幸田国広、浜本純逸、首藤久義、稲井達也、森美智代、島田康行、佐野幹、牛山恵、中村敦雄、村上呂里、草野十四郎、坂口京子、府川源一郎	4．発行年 2020年
2．出版社 溪水社	5．総ページ数 256
3．書名 探究学習：授業実践史をふまえて（文学の授業づくりハンドブック）	

1．著者名 稲井達也	4．発行年 2020年
2．出版社 学事出版	5．総ページ数 148
3．書名 子どもの学びが充実する読書活動15の指導方法	

1．著者名 稲井達也	4．発行年 2020年
2．出版社 学事出版	5．総ページ数 128
3．書名 学び合い育ち合う学校図書館づくり　新しい時代の学びのリノベーション	

1．著者名 稲井達也、磯部延之、竹村和子、他	4．発行年 2021年
2．出版社 悠光堂	5．総ページ数 292
3．書名 司書教諭・学校図書のための学校図書館必携―理論と実践　新訂版	

1．著者名 東北大学方言研究センター編/太田有紀・大橋純一・川﨑めぐみ・櫛引祐希子・甲田直美・小林隆・作田将三郎・櫻井真美・佐藤亜実・澤村美幸・椎名渉子・竹田晃子・田附敏尚・玉懸元・津田智史・中西太郎・吉田雅昭	4．発行年 2019年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 864
3．書名 生活を伝える方言会話［資料編・分析編］：宮城県気仙沼市・名取市方言	

1．著者名 竹田晃子	4．発行年 2020年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 304
3．書名 東北方言における述部文法形式	

1．著者名 大野眞男・竹田晃子・小島聡子	4．発行年 2020年
2．出版社 岩手大学教育学部（科研費研究成果報告書）	5．総ページ数 152
3．書名 釜石 漁火の会がおらほ弁で語る ふるさとの昔話	

1．著者名 稲井達也・影山陽子・松崎史周	4．発行年 2019年
2．出版社 学事出版	5．総ページ数 76
3．書名 高校生・大学生のための読書の教科書 ： アウトプット力を高める11のワーク	

1．著者名 稲井達也・森田盛行・平久江祐二・小川三和子・稲垣達也 他	4．発行年 2019年
2．出版社 悠光堂	5．総ページ数 178
3．書名 「学校図書館ガイドライン」活用ハンドブック　実践編	

1．著者名 稲井達也（編著）	4．発行年 2019年
2．出版社 学事出版	5．総ページ数 160
3．書名 高等学校「探究的な学習」実践カリキュラム・マネジメント-導入のための実践実例23-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松村　裕子 (MATSUMURA Yuko) (00646292)	聖徳大学・教育学部・准教授 (32517)	
研究分担者	稲井　達也 (INAI Tatsuya) (30637327)	大正大学・人間学部・教授 (32635)	
研究分担者	竹田　晃子 (TAKEDA Koko) (60423993)	岩手大学・教育学部・教授 (11201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関